

が、作り手たちが用いるローカルな名称を保持しながら技法について思考することは、本書の資料的価値を高めるという観点からも、検討されてよいアプローチではないかと考えた。

以上、本書の構成を概観し、その特筆すべき点および評者からの要望を記したが、言うまでもなく、ある衣装群の製作技法の研究書としての本書が誇る視覚的、経験的な調査データには唯一無二の価値がある。染織文化の研究者や染織の実践者、そして技術継承をめざす次世代のミャオ族それぞれにとって、本書は意義ある書となるにちがいない。

<参考文献>

宮脇千絵 2017『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社。

宮脇千絵著

『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』

風響社、2017年刊
372頁、6000円＋税

国際ファッション専門職大学
丹羽朋子

本書は、中国の少数民族「ミャオ族」のうち「モン」(Hmong)と自称する人々の、「民族衣装」をめぐる実践について、漢籍史料の精読と文化人類学的な実地調査を通じて多角的に考察した民族誌である。「民族衣装」はメディア等でも盛んに使われる語であるが、そもそもある一着の服が「民族衣装」と目される時、それが誰によって眼差され、いかに規定されるのかは、服飾デザインによる「文化の盗用」が厳しい批判に晒される昨今、きわめて重要な論点だと言える。本書はファッションをめぐるこの根源的な問題を考える上で示唆的な良書である。なお、本書につい

てはすでに文化人類学者等による複数の書評が記されている[佐藤2018:中尾2019:田本2019]。本稿ではそれらとは異なる観点から、おもに本書の調査研究の方法論に着目し、幅広いファッション研究にとっての参照点を探ることとしたい。

前掲の書評で紹介した鳥丸の著書[2017]が、貴州省のミャオ族が自らの衣装を手で「作る」場面を描いていたのとは対照的に、本書の著者である宮脇が赴いた雲南省文山州の村々では、2007-09年の調査当時、日常的に着用される「モンの衣装」の多くが化繊布の既製服と化していた。人々は自然素材で手作りされた「伝統的な」民族衣装を躊躇なく手放すばかりか、旧来の染織技術の喪失すら意に介さない。家々の織機も解体され、もはや「染織を行っていない調査地」に入った著者の関心は否応なく、服を「作る」ことよりも「着る」ことへ、人々はなぜ洋装の普及後も「モンの衣装」を着続けるのかという問いへと向かっていく。このような経緯から本書では、衣装自体と着用者たちの生活の変化をめぐる考察を通じて、①歴史や内外から民族衣装に付される「真正性」の形成、②民族衣装の変化を促す「審美性」の問題、③モンの社会生活における「規範性」としての民族衣装の作用という3つの側面が焦点化され、これらの相互作用のなかでモンの「装いの実践」がいかに現れるのかが明らかにされる。

全体の構成は、360枚超もの写真図版が並ぶ「カラー口絵」に始まり、序章、モンの概要や歴史に関する考察(第1・2章)、モン衣装の生産・流通・所有/使用の各局面の民族誌的記述(第3-6章)を経て、終章の総括に結ばれる。以下、各章の議論を概観した後、評者による注目点を述べたい。

序章(本書、15-41ページ)では、「ローカルな伝統染織や衣服の変化」および「民族衣装」に関する文化人類学他諸分野の先行研究が横断的に取り上げられ、その問題点が検

討される。「民族衣装」は従来、それを実体化された民族集団間の境界を構築する衣服とみなす政治的文脈か、または「日常的な洋服」や「西洋的なファッション」と対置する文脈で論じられてきた。著者はそこに、「民族衣装」の担い手側に内在する文化的論理の等閑視や、固定的で無時間なものとして「民族衣装」が語られることの不備を指摘する。序章ではファッション研究にとっても重要なさまざまな理論的問題が扱われるが、なかでも筆者が興味深く読んだのは、「非西洋のファッション化」に関する議論であった。インドのサリーやインドネシアのバティックに代表される伝統染織や衣装には、ナショナル・アイデンティティのシンボルとされ、さらに欧米のエスニックブームや国内の消費拡大と連動してハイ・ファッション化する、あるいはローカルなファッション・デザイナーによって西洋文化とのハイブリッド化が試みられる等の動向がみられる。このような現代的現象を扱う先行研究に対して、宮脇は、固定的で静態的な「非西洋」の衣服観の乗り越えという面では評価できるものの、「西洋＝近代＝グローバル」、「非西洋＝伝統＝ローカル」という二項対立的アプローチでは、「非西洋」の内部にある「伝統へとどまる力」や、経済的側面以外の変化の要因等が看過されることを問題視する。以上のような先行研究の検討を踏まえて、本書では、「人が社会的文脈や文化的論理に則って身体上に表現していること」すべてを「装いの実践」と捉える、「文化としての装い」という独自の研究視角が提起される。

第1章「モンの概要」(43-66ページ)ではまず、モンの移動の歴史が綴られる。「ミャオ族」の構成の仔細については、前掲の鳥丸[2017]の書評で記したのでここでは省くが、要点は、この民族名称が漢族からの他称に由来するものであり、そこに各地域で異なる衣装による識別が大きく作用したということである。またミャオ族の3つの自称集団のうち、

「モン」は中国国内を超えて東南アジア大陸部の隣接国の山地に広がり、現在はベトナム戦争後のアメリカやフランス等への海外移住者をも含む最大集団であり、このことが後章で論じられるモン衣装の変化の1つの動因にもなっている。つづく本章後半では、調査地となったモンの居住村の生活世界、宗教、生業、年中行事等が概観されるが、この部分と「装い」の問題の連関については後述したい。

第2章「民族識別と『民族衣装』の真正性」(67-126ページ)では、清代に漢族によって残された漢籍史料の記載や絵図、中華民国期から新中国成立後の「民族識別工作」に関わる史資料を紐解きながら、「ミャオ族」の分類過程でモンの「民族衣装」がいかに関与形成され、現在の衣装のあり方に影響を与えたかが考察される。それによれば、衣装を分類する5つの色に基づく民族名称が、新中国成立後に至るまでミャオ族居住区でも汎用的な「他称」として援用され、外部者がモンの「民族衣装」らしさとして求める「真正性」を形成してきた。本章では、この装いの色と結びつけられた「他称」とモン側の「自称」との不一致、それに伴う「装い」の真正性をめぐる齟齬が、彼らの自他峻別にとって重要な意味をもつことが、説得力ある筆致で示される。

第3章「衣装の変化の様相」は、あるモン家庭の3世代の女性の所有衣装の悉皆調査から、「モンの衣装」の具体的な変化とそれに即した着用者の生活変化を浮き彫りにする、本書の軸軸的な章である。前半部(129-135ページ)では、宮脇が文山州各地を訪ね歩いて村々で着られている衣服の形状の微細な差異を確認しながら、人々の語りだけでは明示されない「装いとサブ・グループのあいだにあるつながり」を探索していく過程が辿られる。ここで筆者が見出したのは、「モン」の4つのサブ・グループの衣装は従来、おもにスカートの意匠に違いが見られたが、既製服化の進んだ現在は似通ったデザインと

なっているという事実であった。これを受けて後半部（135-170 ページ）では、文山県のモン・ジュアというサブ・グループの村に住む X 家の 3 世代の女性（1930 年代生まれの祖母、70 年代生まれの嫁=母、90 年代生まれの娘）が所有する全 233 点の衣装を 1 点ずつ写真撮影し、アイテム別にその素材や製作技法、製作者、サイズや重さ等を記録した調査結果が提示される。この調査データを時系列に整理した表（口絵 16-64 ページ）を参照しながら、各年代におけるモン衣装の製作技術の移り変わり、アイテムごとのデザインの変化、「漢族の服」と呼ばれる洋装のアイテムとモン衣装の併用状況等について詳細な分析が展開される。

前章でモン衣装の変化の要因の 1 つに 1990 年代に勃興した既製服産業があったことをふまえて、第 4 章「既製服化による流行と審美性の希求」（171-215 ページ）では、服飾工場や定期市での聞き取りや参与観察から、生産・流通局面の分析が試みられる。モンの既製服は、「市場に流通する化繊布やビーズや刺繍テープといった服飾小物を多用し、ミシンで縫製したもの」である。その工場では分業生産に携わる農村出身の若いモン女性らが技術の熟達度に応じて自由に素材の配色や組み合わせ等を決めている。この他、「モン風プリントの化繊布」など主要な服飾素材の製作を漢族が担っていたり、海外移住したモンに向けた衣装のセット販売が、文山地域内でも全身の色や意匠を統一したコーディネート販売を促すといった、外部ネットワークがもたらす変化に触れられていたりするのも興味深い。このような複雑に絡み合い、競合しながらモン衣装の「流行」を生み出している作り手たちが揃って強調するのは、「他と異なる新しい形態、意匠のもの」を提供することであり、その原動力として「他者とは異なる衣装を着たい」というモン女性たちの「審美性を求める動き」があると、宮脇は論じる。これによってモンの衣装は、ファッショ

ン・デザイナーやブランドによる「特定の目指すべきモデルや参照すべきスタイル」が作られることなく、「方向性を定めないまま、ラディカルに変化している」（263 ページ）。この指摘は、着る人々によって次々と作り変えられていく現代ファッションの研究にも通じる重要な観点だと言えるのではない。

他方、モン女性たちは「流行」のみを求めて衣服を選択しているわけではない。第 5・6 章では転じて、儀礼で着用される衣装のあり方に着目し、モンの「装いの実践」に働く「規範性」の問題が照らされる。第 5 章「葬送儀礼における装いの規範性」（217-234 ページ）では、村民へのアンケート調査を通じて、モンの「伝統的素材」である大麻が、栽培や生産に労力を要するために衰退したものの、化繊布の普及後も各家で細々と生産・保存されていることが示され、さらに葬送儀礼での大麻の使用場面の参与観察を通じて、死者にとっての大麻の重要性が明らかとなる。モンの死者は大麻製の死装束や履物で身を包まれるが、それは、大麻は身体と一緒に腐敗することで「死者の魂とともにあの世に行く」からであり、「腐敗しない化繊布」では代替できないからだと言られる。生者は新しく美しい衣装の「形態」にこだわるのに比して、死者はその「素材性」にこだわり大麻を必要とする。自身や家族の死後を見据えて大麻の衣装を持ち続けるという「規範性」が、生者の装いに影響を及ぼすという考察もまた、注目に価する。

第 6 章「婚姻衣装における規範性と審美性」（235-260 ページ）では、他のサブ・グループから婚入した女性の婚礼衣装の選択や結婚後の「装いの実践」において、「規範性」と「審美性」が働く場面が記述される。そこからわかるのは、モン女性には周囲の女性たちとの相互関係のなかで、「モンという集団としての共有意識」から逸脱することなく「自分が何を着るべきか臨機応変に選択」しており、そのような選択の積み重ねからも緩やかな衣装

変化がもたらされているということである。

終章(261-268ページ)では、これまでの議論を振り返ったうえで、「モンの『民族衣装』は、そこに備わる真正性、審美性、規範性がさまざまな時空間において柔軟に切り替わりながら現れるという意味において『民族衣装』だと言える」(267ページ)という結論と、今後の研究の展望が示される。

次に幅広いファッション研究への応用可能性という観点から評者が魅力を感じた、本書の調査研究の方法について述べたい。第一に、歴史文献と実物資料の精査、フィールドワークでのインタビュー・アンケート・参与観察等の、多様な調査手法を用いた圧倒的な質・量を誇るデータと、その組み合わせの妙がある。データ提示の真骨頂である第3章のX家の所有服調査を例にとると、既述の1点ごとの衣装調査表(口絵)に加えて、3人の女性が所有する衣装のアイテム別の総数や、そのうち筆者が滞在した約2年半の間に着用と洗濯が確認された枚数までもが作表される(146、149ページ)。これによって世代ごとのアイテム別の着用率の違いや、スカートのなかでも「現役」のものを使用せずに保管し続けられているものがどの程度あるか等が数値で可視化され、この実物調査の結果とそれに対する聞き取り調査が組み合わさることで、たとえば着用頻度の低さの理由が、祖母世代では親の形見や死装束としての未使用品の保管にあり、都会暮らしの孫世代では毎年新調されるも流行が過ぎてタンスの肥やしとなる「晴れ着」にあるといった、着用者自身にも意識化されていない事象が浮かび上がる。また各アイテムの時代ごとの変遷についても、口絵の表に記された衣装の形や重量、素材等の物質的な情報と、着用者がその服を着て実際にどう動くのか(たとえば労働時の立ち姿や座り姿、あるいは晴れ着として洋装のブーツと合わせる見栄え等)を観察したテキストや写真資料とが引き合わされるこ

とで、着用場所や目的に即した衣装の機能性と、それに応じた形態や意匠の変化の推移について、実証的な分析が可能となる。

第二に、こうした緻密な調査データの総合を通じて、「一着の衣装」がはらむ多面的な時間性を扱う方法論があげられる。上述したX家の所有服の調査では、3世代にわたるモン衣装の素材や意匠の変化と、1980年代以降の綿布や毛糸の入手の易化やミシンの普及、今世紀の道路整備や労働・教育環境の変化等が重ねて論じられるが、筆者の考察はそのようなモン衣装全体の時系列的変化のみにとどまらない。他にも、1人のモン女性の一生にわたる装いの変遷、またある特定の衣装の変化の様相(未使用から晴れ着、日常服、労働着や他者への「おさがり」、補修や用途の変更を経てついにはボロへと作り変えられる)といったさまざまな切り口から、「一着の衣装」がもつ多様な意味や価値、位置づけが読み解かれていく。X家のある一着の衣装はさらに、後続章の生産・流通局面や儀礼における「装い」の選択に関する議論を経て、再びモン衣装全体を取り巻く広範な時空間に置き直されることで、衣装をめぐるより多層的な思考をひらく起点ともなりうる。従来のミャオ族の服飾研究の「時間という概念を考慮した分析」の不足(266ページ)という課題に対して、本書が試みた、衣装に取り込まれた複数の時間性を照射するアプローチは、「作り、売り、買い、着て、保管/廃棄/再利用する」一連のプロセスの統合的な掌握が求められる現代ファッションの研究にとっても、きわめて示唆的だと思われる。

最後に、本書の読後に浮かんだ疑問についても述べたい。それは端的に言えば、「作る」と「着る」ことの切断の経験、それと関連したモンの人々と身体や「自然」の関係性をめぐる問いである。本書では、かつては衣装を作る技術や図案の良し悪しが作り手の評価に繋がったのに対して、既製服化以降は女

性たちは新しくきれいな衣装を着ることを通じて自己を表現するようになった(210ページ)と述べられており、評者はこの記述を、モン女性たちはかつても今も「他者との差別化」を希求しているという文脈で読んだ。だが、ここで言う「良い」衣装製作の技術や図案が元来、他者との差異化や同一化の役割のみを担うものであったかは、議論の余地があるのではないかと。言い換えれば、モンの人々にとって服や布を身にまとうこととは、(少なくともかつては)記号的な差異化行為としての「装い」のみに還元されない、文字通り「身体」に深く結びつく経験であった可能性はないだろうか。評者がこのような問いをもったのは、地域や習俗が異なるとはいえ、烏丸[2017]では、貴州省のミャオ族の衣装を「作る」ことにおいては、彼らと深い関係を結ぶ自然現象や動植物の姿、その独自のコスモロジーを反映した刺繍や織物の文様が不可欠の要素であることが強調され、護符的な文様を施したアイテム等も多く取り上げられていたからである。翻って宮脇の書では、モンが、素材が変わっても蒙の衣装がそれである条件として、刺繍の文様や色を挙げたこと(223ページ)が述べられるはするものの、漢族などの外部者が工業製品化した「刺繍テープ」や「ろうけつ染め風の図案がプリントされた布」に置き換えられた(157-166ページ)ことで、刺繍やその文様が本来の意味を欠いた「装飾」と化したか否かといった問題には触れられていない。

その一方で、本書の中には、「あの世」や生と死の循環的な生命観との関連から死装束を論じた第5章を筆頭に、第1章でも人間から動植物や天体にいたるまで「万物に魂が宿る」と考える蒙のコスモロジーや、人に災禍をもたらす「悪い霊」を取り除いた

り、幼子の抜けてしまった「魂」を呼び寄せたりするシャーマン儀礼等も詳述されており(57-59ページ)、そこにはモンが自らの身体と「自然」との間にとり結ぶさまざまな関係が看取される。後章では死者が求める大麻製の衣装に関する議論以外には、このような要素は生者の「装い」と直接関連しないものとして後景化しているが、今後、ますます布や衣装を「作る」と「着る」ことの経験の切断が進み、都会暮らしも増えていく状況のなかで、モンの人々の身体性や彼らにとっての「自然」のあり方がいかに変化していくかを射程に入れつつ「装い」や衣装の考察がなされることで、本書で論じられる「審美性」や「規範性」もまた、より多面的な分析概念へと更新し得るのではないかと考えた。

もちろん、こうした問いは本書の充実した民族誌的記述があったからこそ喚起されたものである。本書は「民族衣装とは何か」という課題に新たな視座を提示する画期的な論考であるとともに、広くファッションや流行研究などにも敷衍可能な方法論や調査手法の宝庫である。今後、幅広い分野においても本書の研究視座や調査・分析手法の応用が期待される。

<参考文献>

- 佐藤若菜 2018 「書評」 宮脇千絵 『装いの民族誌——中国雲南省蒙の「民族衣装」をめぐる実践』 風響社, 2017, 372p. 『東南アジア研究』 55(2): 412-414。
- 田本はる菜 2019 「書評」 宮脇千絵著 『装いの民族誌——中国雲南省蒙の「民族衣装」をめぐる実践』 『文化人類学』 83(4): 683-686。
- 烏丸知子 2017 『ミャオ族の民族衣装 刺繍と装飾の技法——中国貴州省の少数民族に伝わる文様、色彩、デザインのすべて』 誠文堂新光社。
- 中尾世治 2019 「書評」 宮脇千絵著 『装いの民族誌——中国雲南省蒙の「民族衣装」をめぐる実践』 『年報人類学研究』 10: 129-135。